人間科学研究所年次総会・私立大学戦略的研究基盤形成支援事業公開研究会
インクルーシブ社会に向けた支援の＜学＝実＞連環型研究キックオフミーティング
――対人支援における大学と社会実践の連携――

2014 年 1 月 25 日（土）

第 1 部　ポスターセッション　抄録一覧

Poster Session: Abstracts

No.	演題 Title	主発表者 Main Presenter
1	過程と発生を捉える TEA（複線径路・等至性アプローチ）―不定とともにある実存を探究する、人間科学の質的研究法 TEA (Trajectory Equifinality Approach) for grasping process and generation: Qualitative research method of human science which inquires existence with uncertainty	安田裕子 (YASUDA Yuko)
2	三次元表現による集団討議プロセス可視化ソリューションの可能性 Potential for a visualization solution of group discussion processes by 3D expression	上村晃弘 (UEMURA Akihiro)
3	高齢者の運動抑制-反応タイプと音刺激の影響 Motor Inhibition in Elderly: Impacts of Response Type and Auditory Stimulus	土田宣明 (TSUCHIDA Noriaki)
4	うつ予防プログラムが認知機能に与える影響 Effects of the depression prevention program on changes in cognitive functions	高橋伸子 (TAKAHASHI Nobuko)
5	自閉症スペクトラム児・者の伴走的支援-10 年間の治療教育プログラム開発の試み- A Escorted Support for Children with Autism Spectrum: Trying to Develop the Program of Education and Care	荒木穂積 (ARAKI Hozumi)
6	大学内模擬店舗のデザインと運営・障害者の継続的支援のためのポートフォリオ作成 Designing and Managing University's Simulation Shop for Job-Training by Persons with Disabilities; Making portfolios for successive support	中鹿直樹 (NAKASHIKA Naoki)
7	トランスナショナルな外国人児童学習支援ネットワークの構築に向けたアクションリサーチ：デジタルブックによるボランティ	小澤亘 (OZAWA Wataru)

	アネットワーク構築の可能性 Action Research to build a Transnational Volunteer Support Network for Foreign Students' Education: Possibility of Digital Book System as a Tool of Volunteer Linkage	
8	ドメスティック・バイオレンスと修復的司法 Domestic Violence and Restorative Justice	金成恩 (KIM Sungeun)
9	障老病異をめぐる包摂／排除 Inclusion and/or Exclusion involving a History of "Ars Vivendi"	渡辺克典 (WATANABE Katsunori)
10	「被害」の語りのアーカイビング――実践と、実践のための論理 Archiving Narratives of victims: A Logic of/for Practice	山口真紀 (YAMAGUCHI Maki)
11	シュッツのレリヴァンス概念の看護研究上の活用方法論 Alfred Schutz's concept of "relevance " in nursing research: a methodological study	山中恵利子 (YAMANAKA Eriko)
12	不妊の生物人口学的解明：パイロット調査の設計と実施 A Biodemographic Approach to Reproductive Aging	玉置えみ (TAMAKI Emi)
13	『災害時における社会福祉労働者の生存・生活保障実践に関する研究』―宮城県の社会福祉労働者へのインタビュー調査を通して―（中間報告）	石倉康次 (ISHIKURA Yasuji)
14	情報の有機的連関による社会的支援の可能性：コミュニケーション・ツールとしてのアーカイブ The Utility of Narrative Archives as Social Support	福田茉莉 (FUKUDA Mari)

人間科学研究所年次総会・私立大学戦略的研究基盤形成支援事業公開研究会
ポスターセッション演題・抄録
No.1

過程と発生を捉える TEA（複線径路・等至性アプローチ）

―不定とともにある実存を探究する、人間科学の質的研究法

TEA (Trajectory Equifinality Approach) for grasping process and generation: Qualitative research method of human science which inquires existence with uncertainty

安田裕子（立命館大学衣笠総合研究機構 専門研究員）
サトウタツヤ （立命館大学文学部 教授）
福田茉莉（立命館大学衣笠総合研究機構 専門研究員）
木戸彩恵（立命館大学立命館グローバル・イノベーション機構 専門研究員）

質的研究の対象を「経験・現象」とすれば、そのメカニズムを把握するか、もしくはプロセスを捉えるかで、目的及び用いる手法が大きく分かれる。また、観察であれ聴きとりであれ、認識された諸事象を捉えるか、それらに通底する何らかを洞察するかという観点によっても、その手法は二分されよう。

質的研究法の理論的整理を行ううえで、「経験・現象」を中心におき、「構造・機能」と「過程・発生」を両極とする軸を設定し、また、それに直交するかたちで「実存」と「本質」を両極とする軸を構成した。そして、各質的研究法を４象限に配置・整理した。

その結果として明らかにした配置図は当日の報告で提示するが、複線径路・等至性アプローチ（TEA）は、「実存」の「過程・発生」を捉え、「個別性」を探求するのに有用な方法論として理解することができる。

人は、今後を知りえない非可逆的時間とともに生きる存在なのであり、その行動選択の様相、すなわち実存は、実現し得なかったいまだない可能世界とともに把握することが重要である。TEA は、そうした人の生が成りゆくリアルな様相を捉えるのに有用な方法論であるといえる。

（「インクルーシブ社会に向けた支援の＜学=実＞連環型研究」方法論チーム）

人間科学研究所年次総会・私立大学戦略的研究基盤形成支援事業公開研究会
ポスターセッション演題・抄録
No.2

三次元表現による集団討議プロセス可視化ソリューションの可能性

Potential for a visualization solution of group discussion processes by 3D expression

上村晃弘 （立命館大学立命館グローバル・イノベーション研究機構 補助研究員）
斎藤進也 （立命館大学立命館グローバル・イノベーション研究機構 専門研究員）
若林宏輔 （立命館大学立命館グローバル・イノベーション研究機構 専門研究員）
山崎優子 （立命館大学立命館グローバル・イノベーション研究機構 専門研究員）
サトウタツヤ（立命館大学文学部 教授）
稲葉光行（立命館大学政策科学部 教授）

情報インフラの普及・拡大によって社会的に重要な意志決定の公開が容易になってきた。近年では、行政組織などがインターネット上に会議の議事録や動画を開示している。ただし、膨大な時間に渡る議論の様子が、分析などが行われないままの状態でインターネット上に存在しているものもある。ただ公開されているだけでは、これらは議論の透明性を担保していることのアピールを越えていない。すなわち、これらの情報開示が新たな価値発掘・創造へと繋がっていない。今回は、インターネット上に公開されている経済産業省資源エネルギー庁基本政策分科会の議事録を有効利用するために、テキストマイニングと三次元情報可視化ビューア（KACHINA Cube System）を用いた手法開発とその情報利用の可能性探索についての活動を報告する。

（「インクルーシブ社会に向けた支援の＜学=実＞連環型研究」方法論チーム）

人間科学研究所年次総会・私立大学戦略的研究基盤形成支援事業公開研究会
ポスターセッション演題・抄録
No.3

高齢者の運動抑制-反応タイプと音刺激の影響-

Motor Inhibition in Elderly: Impacts of Response Type and Auditory Stimulus

土田宣明 （立命館大学文学部 教授）
吉田甫（立命館大学文学部 教授）
大川一郎（筑波大学大学院人間総合科学研究科 教授 /
立命館大学人間科学研究所 客員研究員）

予見的支援プロジェクトの一つの柱である「高次認知研究」の一環として，高齢者の運動コントロールの問題を実験的に検討した。対象としたのは，若年成人 27 名と高齢者 39 名であった。反応形態(type of response)の違いにより，運動の抑制に影響がでるのかを，2 つの年齢群を対象にして比較した。さらに，視覚刺激と同時に提示される音刺激(tone stimulus)が運動の抑制に与える影響を同時に分析した。その結果， 高齢者では反応形態の違いが，誤反応率に大きく影響することが分かった。さらに，音刺激の提示は，若年成人，高齢者ともに反応を促進し，反応時間を短くする効果のあることが確認された。しかし，高齢者では若年成人に比べ，誤反応を誘発する率も高くなることが分かった。高齢者においては，運動に付随する神経システムの興奮が運動コントロールに強く影響することが示唆された。

（「インクルーシブ社会に向けた支援の＜学=実＞連環型研究」予見的支援チーム）

人間科学研究所年次総会・私立大学戦略的研究基盤形成支援事業公開研究会
ポスターセッション演題・抄録
No.４

うつ予防プログラムが認知機能に与える影響

Effects of the depression prevention program on changes in cognitive functions

高橋伸子　（立命館大学人間科学研究所 客員研究員）
石川眞理子　（立命館大学人間科学研究所 客員研究員）
土田宣明　（立命館大学文学部 教授）

高齢者支援研究の一環として，うつ予防の取り組み(代表: 日下菜穂子)に参加し，うつ予防のプログラムが認知機能にどのような変化(効果)を及ぼしたのかを検討した。効果測定として，FiveCog を用いた。FiveCog は，高齢者用の集団式知能検査である。介入の効果をみると，「エピソード記憶」にのみ統計上有意な変化が確認された。全ての項目で得点の上昇がみられたが，統計上有意だったものは「エピソード記憶」のみであった。「生きがい創造教室」(プログラム名称)に参加することで，他者と社会的なつながりを保つ必要がある。さらに，自己に関わることを「言葉」で表現し，他者が「言葉」で表現したことを傾聴し，理解しなければならない。３か月前後の比較的短期間の取り組みであったとはいえ，このような活動に参加することが，言葉を使う記憶であるエピソード記憶の改善を促した可能性がある。

（「インクルーシブ社会に向けた支援の＜学=実＞連環型研究」予見的支援チーム）

人間科学研究所年次総会・私立大学戦略的研究基盤形成支援事業公開研究会
ポスターセッション演題・抄録
No.5

自閉症スペクトラム児・者の伴走的支援

-10 年間の治療教育プログラム開発の試み-

A Escorted Support for Children with Autism Spectrum: Trying to Develop the Program of Education and Care

荒木穂積（立命館大学大学院応用人間科学研究科 教授）
竹内謙彰（立命館大学産業社会学部 教授）

自閉症スペクトラム児・者を対象に、大学の研究施設を活用して、2002 年より治療教育プログラム開発に取り組んでいる。支援者は応用人間科学研究科等の大学院生で、支援対象者は京都府下・市内に在住の自閉症スペクトラム児・者（5 歳～17 歳）とその家族である。伴走的支援の観点から、治療教育プログラム開発の基本理念およびその活動成果を報告したい。

（「インクルーシブ社会に向けた支援の＜学=実＞連環型研究」伴走的支援チーム）

人間科学研究所年次総会・私立大学戦略的研究基盤形成支援事業公開研究会
ポスターセッション演題・抄録
No.6

大学内模擬店舗のデザインと運営・障害者の継続的支援のための ポートフォリオ作成

中鹿直樹（立命館大学人間科学研究所 客員研究員／立命館大学大学院応用人間科学研究科 非常勤講師）
望月昭（立命館大学文学部 教授）
滑田明暢（立命館大学立命館グローバルイノベーション研究機構 専門研究員）
尾西洋平（立命館大学大学院応用人間科学研究科 修士課程）
小島遼（立命館大学大学院応用人間科学研究科 修士課程）

大学内に設けられた模擬店舗における障害のある高校生の実習を通して、当事者の継続的キャリア・アップの実現のために有効な情報共有、情報移行（ポートフォリオの制作・運用）のシステムを、総合支援学校高等部と連携して開発した。

構造化された店舗業務の中で、参加した生徒の個別の「できる」行動（援助つきで成立する）を分析的に確認し、そこで継続すべき「援助」内容とともに、絶えず次なるステージでの支援（援助・教授）が、当事者が「正の強化」でベスト・パフォーマンスを示せるような発展を目指す創造的な「情報」を構築することが目指された。この作業は、対人援助の作業の中の「援護」機能の具体的な手法の開発であるが、同時に、従来の学範（応用行動分析など）からの発展としての「対人援助学」の特徴を確認していくものである。　　（「インクルーシブ社会に向けた支援の＜学=実＞連環型研究」伴走的支援チーム）

Designing and Managing University's Simulation Shop for Job-Training by Persons with Disabilities; Making portfolios for successive support

NAKASHIKA Naoki (Institute of Human Sciences, Visiting Researcher)
MOCHIZUKI Akira (College of Letters, Professor)
NAMEDA Akinobu (Ritsumeikan Global Innovation Research Organization, Senior Researcher)
ONISHI Youhei (Graduate School for Science for Human Services, Master's Program Student)
KOJIMA Ryo (Graduate School for Science for Human Services, Master's Program Student)

We have set up a simulation shop (Café Rits) in the campus for job-training by persons with disabilities. Students of special-needs schools attended job-training at Café Rits, and they were supported by Ritsumeikan university's students/graduates students (Student Job Coach: SJC). In cooperation with special-needs schools, we have developed the system of sharing information about a person with disability among the supporters.

We have done following two tasks during the job-training; 1) Analyzing "dekiru" of the student. Dekiru means the student's behavior with supports. 2) Searching the setting in which the student could show best-performance maintained with positive reinforcement. Information of that tasks is the key to successively support the student. How do we describe and share that information to maximize cooperation?

This question is how do we "advocate". Moreover this question is the process to confirm the features of Human Serviceology (the circulation of three functions: Assist-Advocate-Instruct).

（"Translational Studies for Inclusive Society" Project,
Research on Escorted Support for Inclusive Society Team）

人間科学研究所年次総会・私立大学戦略的研究基盤形成支援事業公開研究会
ポスターセッション演題・抄録
No.7

トランスナショナルな外国人児童学習支援ネットワークの構築に向けたアクションリサーチ：デジタルブックによるボランティアネットワーク構築の可能性

小澤亘 （立命館大学産業社会学部 教授）
世森歩 （立命館大学社会学研究科 博士課程前期課程）

国境を越えて生じた問題に対して、国境を越えたボランティアネットワークの構築によって対応できないかという斬新な発想に基づき、現在、外国人児童の支援を目的として、DAISY という電子ブック規格を応用し、ボランティア支援ネットワークの構築をこころみている。今春には、多言語 DAISY 図書の共有化インターネットサイトとして、rits-daisy.com を立ち上げた。今回、滋賀県湖南市や京都市をフィールドとして進めているアクションリサーチの現状を報告する。

（「インクルーシブ社会に向けた支援の＜学=実＞連環型研究」伴走的支援チーム）

Action Research to build a Transnational Volunteer Support Network for Foreign Students' Education: Possibility of Digital Book System as a Tool of Volunteer Linkage

OZAWA Wataru（College of Social Sciences, Professor）

We are now embarking on a fresh project to build a transnational volunteer support network for foreign students by using the digital book technology called DAISY. In this summer, we built our website (http://rits-daisy.com/), from where everybody can download the DAISY books free of charge. Users are admitted to change these digital books to the better ones. Through this open source policy we expect the quality of digital book will be developed by volunteer producers.

（"Translational Studies for Inclusive Society" Project,
Research on Escorted Support for Inclusive Society Team）

人間科学研究所年次総会・私立大学戦略的研究基盤形成支援事業公開研究会
ポスターセッション演題・抄録
No.8

ドメスティック・バイオレンスと修復的司法

Domestic Violence and Restorative Justice

金成恩 （立命館大学立命館グローバル・イノベーション研究機構 専門研究員）

ドメスティック・バイオレンスの被害者には、保護施設から退所後にも加害者との婚姻関係を維持したり、離れていてもストーキングを受けたりする特徴がある。それを勘案すると、司法機関による加害者の処罰及び保護施設への避難、保護命令により加害者から被害者を分離させることだけでは、ドメスティック・バイオレンスの根本的な問題解決には限界がある。そこで、被害者の被害回復、加害者の責任認定、共同体の支援という要素を持っている修復的司法モデルの適用が考えられる。しかし、修復的司法は、当事者の自発的な参与を前提にしているため、被害者のコミュニケーション拒否及び自己決定能力の欠如、被害者の安全の問題などが指摘されている。今回の報告は、被害者支援の実態及びその特性を把握し、ドメスティック・バイオレンスに修復的司法が適用可能か否かについて検討するため、韓国の被害者支援関連機関のヒアリング調査を行なったものである。

（「インクルーシブ社会に向けた支援の＜学=実＞連環型研究」修復的支援チーム）

人間科学研究所年次総会・私立大学戦略的研究基盤形成支援事業公開研究会
ポスターセッション演題・抄録
No.9

障老病異をめぐる包摂／排除

Inclusion and/or Exclusion involving a History of ″Ars Vivendi″

渡辺克典（立命館大学衣笠総合研究機構 准教授）
安部彰（立命館大学衣笠総合研究機構 准教授）
堀田義太郎（東京理科大学講師 ／ 立命館大学生存学研究センター客員研究員）

インクルーシブとは、これまで物理的・制度的な理由によって社会的参加が困難となった人びとへの援助・支援的な活動をすすめる枠組みとして位置づけられている。だがその一方で、「非-参加状態にある人びと」において、社会参加が果たせない中で自ら（これは個人だけを指すわけではなく、カテゴリーを指すこともある）の生をよりよくするための技法を築き上げてきた歴史や活動が存在している。その歴史の中では、参加-非参加状態を巡る包摂と排除との関係が、固定的であるわけではなく、流動的に変化・変容する様相を確認することもできる。この様相は、「非参加状態にある／固定化されつつある人びと」の代表的なカテゴリーとされる「障老病異」におかれた人びとにおいて確認される。こういった「生の技法」の集積と考究は、インクルーシブをめぐる＜学＝実＞の連関において、それを再帰的／反省的にとらえるために不可欠である。

（「インクルーシブ社会に向けた支援の＜学=実＞連環型研究」基礎研究チーム）

人間科学研究所年次総会・私立大学戦略的研究基盤形成支援事業公開研究会
ポスターセッション演題・抄録
No.10

「被害」の語りのアーカイビング――実践と、実践のための論理

Archiving Narratives of victims: A Logic of/for Practice

山口真紀（立命館大学大学院先端総合学術研究科 一貫制博士課程）

「被害」をこうむった人々の社会的包摂に向けて、何がなされてきただろうか。ひとつの大きな向きとして、特に近年、災害の被災者や理不尽な事件の被害者の体験を収集・保存する動きが様々な形で生起している。本報告は「被害」の語りをアーカイビングしていくような実践と、それを支える論理について考察する。「被害」をめぐる資料収集・保存活動の実際的意義とは、第一に、出来事に際して人々が現実にとった行動の第一次的資料となること。第二に「被害」の多角的側面の解明。第三に、人々の経験や主観的な意味づけから歴史的・社会的「現実」を抽出することの可能性が挙げられる。報告では村上春樹の『アンダーグラウンド』（1997 年）を「被害」の語りの収集・発信の実践として位置づけ、上記の意義と照らしながら分析すると同時に、そうした実践を支える論理を整理する。以上の作業は、「被害」をめぐる支援の理論的基盤構築の一助となるだろう。

（「インクルーシブ社会に向けた支援の＜学=実＞連環型研究」基礎研究チーム）

人間科学研究所年次総会・私立大学戦略的研究基盤形成支援事業公開研究会
ポスターセッション演題・抄録
No.11

シュッツのレリヴァンス概念の看護研究上の活用方法論

Alfred Schutz's concept of "relevance" in nursing research: a methodological study

山中恵利子（藍野大学医療保健学部 講師 / 立命館大学大学院社会学研究科 博士課程後期課程）
松田亮三 （立命館大学産業社会学部 教授）

看護師の心に残っている体験、一度振り返って整理しなければならない看護体験を看護師の方々に語ってもらい、「その語り」のなかから看護の知を引き出していく上で、アルフレッド・シュッツのレリヴァンス概念がどのように有用かを検討することが本研究の目的である。このため、ベナー看護論に示される現象学的存在論、グランデッドセオリー、エスノメソドロジー、という看護分野において用いられている三つの研究手法と、レリヴァンス概念を焦点とする現象学的社会学のアプローチとの対比を行う。それらのアプローチにどのような類似点と差異点があり、看護体験談の分析にどのように貢献することが期待できるのか、またはできないのか、つまりそれぞれのアプローチの特徴について検討する。本報告では、其々の研究手法が＜言葉の位置づけ―言語の発生＞をどのように認識しているのかという視点に焦点をあてて見ていきたい。

（2013 年度 人間科学研究所萌芽的プロジェクト採択
「対人援助におけるエビデンス-実践回路研究」）

人間科学研究所年次総会・私立大学戦略的研究基盤形成支援事業公開研究会
ポスターセッション演題・抄録
No.12

不妊の生物人口学的解明：パイロット調査の設計と実施

A Biodemographic Approach to Reproductive Aging

玉置えみ （立命館大学産業社会学部 助教）
小西祥子（東京大学大学院医学系研究科 助教）

日本の少子化は、20－30 歳代女性における晩婚化および出産の先送りに加え、加齢にともなう再生産機能の老化（不妊）からも影響を受けていると推測される。少子化が大きな社会問題として認知されている一方、その背後に存在する生物学的要因に関する研究はほとんどされていない。本プロジェクトの目的は、働き方やストレス、睡眠、喫煙、などが不妊のリスクに及ぼす影響を疫学的手法から検証することにある。2013 年度はパイロットスタディとして、18－44 歳の女性（3000 人）を対象としたインターネット調査を実施する。本発表では、このパイロットスタディの設計と内容を発表する。

（2013 年度 人間科学研究所萌芽的プロジェクト採択
「生物人口学に基づいた効果的な少子化対策の研究」）

人間科学研究所年次総会・私立大学戦略的研究基盤形成支援事業公開研究会
ポスターセッション演題・抄録
No.13

『災害時における社会福祉労働者の生存・生活保障実践に関する研究』―宮城県の社会福祉労働者へのインタビュー調査を通して―（中間報告）

石倉康次 （立命館大学産業社会学部 教授）
池田さおり （立命館大学大学院社会学研究科 博士課程後期課程）
北垣智基 （立命館大学大学院社会学研究科 博士課程後期課程）
荒川亜樹 （立命館大学大学院社会学研究科 博士課程後期課程満期退学）
石川由美 （立命館大学大学院社会学研究科 博士課程後期課程）

本研究では、先の東日本大震災において、津波と大地震の被害に見舞われた宮城県沿岸部の福祉事業所に勤務する労働者を対象としたインタビュー調査を通して、被災地の福祉労働者による実践活動の経過と、非常時における判断や実践上の工夫を、証言をもとに明らかにする。そのことを通じて、震災以降、復興に関わってきた福祉労働者が果たした役割と課題を明らかにするとともに、震災から見える現在の福祉政策の課題、また今後の震災への対応に向けた教訓を導き出すことが目的である。

今回の中間報告では、震災を経験した三領域の社会福祉現場（高齢・障害・子ども）で働く労働者の語りから、震災以降の復興に関わってきた福祉労働者が、様々な困難を経験しながらも、その実践を通じて当事者の生存・生活保障を担う役割を果たしてきたことが示された。同時に、福祉現場における災害への備え、行政の対応、現行の福祉政策・制度上の課題等についても、一定の実態が明らかとなった。

（2013 年度 人間科学研究所萌芽的プロジェクト採択「宮城県の福祉労働者へのインタビュー調査による「利用者と職員の命をつなぐ」実践に関する研究」）

人間科学研究所年次総会・私立大学戦略的研究基盤形成支援事業公開研究会
ポスターセッション演題・抄録
No.14

情報の有機的連関による社会的支援の可能性：コミュニケーション・ツールとしてのアーカイブ

The Utility of Narrative Archives as Social Support

福田茉莉　（立命館大学衣笠総合研究機構 専門研究員）
滑田明暢（立命館大学立命館グローバルイノベーション研究機構 専門研究員）
山田早紀（立命館大学大学院文学研究科 博士課程後期課程 ／
日本学術振興会 特別研究員）

本プロジェクトの目的は，社会的孤立が生じやすい状況下において，情報の有機的連関およびコミュニケーションによる社会的支援の可能性を検討することであった。とりわけ，生きづらさや社会的困難を抱える人たちが社会的に孤立してしまう状況に対するナラティヴ・アーカイブの支援の可能性を議論した。

研究 1. デジタル・アーカイブの実用性

本研究では，供述調書を調査対象とし，供述内容を可視化するためにカチナキューブを用いて，ナラティヴ・アーカイブを作成した。その後，供述内容を可視化がもたらすコミュニケーションを検討した。

調査 2. ウェブ・アーカイブの応用可能性

本研究では，インターネット上に存在する掲示板や情報サービスに焦点を当て，そのサイト上でどのようなコミュニケーションが実施されているのかを分析した。とりわけ社会的に孤立しがちな状況下にある難病患者や育児に関する事例を取り上げた。

各事例から，法や医療，文化などの場面におけるナラティヴ・アーカイブは，情報の有機的連関をうみだすひとつの記号として機能していることが明らかになった。

（2013 年度 人間科学研究所萌芽的プロジェクト採択「情報の有機的連関による社会的支援の可能性：コミュニケーション・ツールとしてのアーカイブ」）